様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 27 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９４０４００６
研究課題名（和文） 歴史的港湾都市における持続可能な遺産マネジメントとツーリズム開発に関する研究
研究課題名（英文） A Study on Sustainable Heritage Management and Tourism Development in Historical Port Towns
研究代表者
西山　徳明（NISHIYAMA NORIAKI）
北海道大学・観光学高等研究センター・教授
研究者番号：６０２４３９７９

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、国内外の歴史的港湾都市を対象事例とし、「ヘリテージ・ツーリズム開発による地域発展の条件は、遺産の重要性（significance）の真正な継承と地域社会（local community）の持続的な発展の相互補完による実現である」とする研究仮説の証明である。事例研究では、地域住民の主体的関与がないままに推進される観光開発による文化遺産の顕在化と消失の実態、住民生活と共にある有形・無形の遺産の総合的価値、社会基盤の現状等を把握し、各発展段階の事例の比較により、上記仮説を検証し、ヘリテージ・ツーリズム開発の課題を示した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to prove the hypothesis that “the condition of regional development through heritage tourism is to realize authentic inheritance of the heritage significance and sustainable development of local community in their interdependency”. With case studies, challenges of heritage tourism development is shown focusing on questions like the followings: 1) what is the actual conditions of exposing and demolition of cultural heritage through tourism development without subjective participation?; 2) what is the integrated value of tangible and intangible heritage with people’s lives?; and 3) what is the actual conditions of social infrastructure? The above hypothesis is verified through analysis and comparison of developing stages of each case to show the challenges of the heritage tourism development.

交付決定額
（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
２００８年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
２００９年度	2,100,000	630,000	2,730,000
２０１０年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
総　計	12,300,000	3,690,000	15,990,000

研究分野：複合新領域
科研費の分科・細目：地域研究
キーワード：歴史的港湾都市、文化遺産、ツーリズム、リビングヘリテージ、国際協力

１．研究開始当初の背景

(1)「遺産」概念と遺産マネジメント

本研究のキーワードである「遺産（ヘリテージ）」とは、単に「祖先から遺された財産（モノ）」のみを指すのではなく、「子孫に遺したい資産（モノやコト）」を含む概念である（河野 1995, 西山 2006）。また、まずは賦与された大切な遺産を真正に継承すること、

そしてそれを真摯に見つめること、そこから豊かな感性と価値理解の能力が育まれ、将来世代がまた大切に継承したくなる価値の創造が可能になる（江面 2006）。こうして現代の我々はもとより将来世代が価値を創造し、さらにそれらを遺産として未来の世代へ継承する営みが遺産マネジメントであり、現代においてこのことはヘリテージ・ツーリズム開発の局面において顕著に観察できる。

(2)「文化多様性」の視点

近年の文化多様性保護の国際的議論（例えば「ユネスコ文化多様性宣言 2002」）には、グローバリズム優勢下における地域・民族文化の相対的多様性が、種の多様性同様に保護されるべきとする視点がある一方、一つの地域・民族文化は顕著な特徴（側面）のみで語られるべきではなく、多様な側面から評価され絶対的かつ有形・無形遺産の総体として保護されるべきとの視点がある。これを持続的なツーリズム開発から見た場合、地域においては、他文化との相対的差別化を図る外向きの作業と同時に、個々絶対的な存在である地域文化をアイデンティティに昇華させる内的作業が求められる。そのためには地域に内在する絶対的な文化多様性を発見・理解し、豊かに活用できるまちづくりの方法論が必要である。

(3)地域開発型まちづくりとしての海外文化遺産研究

本申請に関わる日本人による先行海外文化遺産研究は大きく２つに分類できる。一つは人類未知の遺産を世界各地において発見、価値づける客観学術調査で、例えば法政大学大学院エコ地域デザイン研究所による集落・都市や遺跡地域に対する一連の研究が挙げられ、今ひとつは、それらの保存・整備のための当該政府やユネスコ等からの依頼に基づく国際協力をベースとする調査・研究で、東京文化財研究所や千葉大学等研究機関と文化庁との共同によるベトナムや韓国都市における木造建築物修理や景観保存の技術移転を伴うもの等がある。本研究はこの 2 方向の海外文化遺産研究の手法や技術を具体事例地域において総合化することをめざすものである。これまで申請者らチームは、歴史都市を面的に文化遺産として価値付け保存・保全する伝統的建造物群や史跡の保存技術、都市計画や景観保存・形成の技術を国内地域多数において開発してきた経験があり、これを持続的ツーリズム開発の研究成果と結びつけ、文化遺産マネジメントの遅れている国や地域において地域開発型まちづくりとして展開することを目標とする。申請者はすでに平成 15ー17 年度基盤研究（B）「文化遺産管理とツーリズムの持続可能な関係構築に関する研究」（研究経費 1,050 万円）において、国内およびアジア太平洋地域を対象とした基礎調査を実施済みであるとともに、日本国内地域（太宰府市、萩市、竹富島）を事例とする文化遺産まちづくりやフィールドミュージアムによるマネジメントモデルを開発済みであり、具体地域レベルでの国際協力を視野に入れた文化遺産とツーリズム開発の総合的な研究が可能である。

２．研究の目的

観光（ツーリズム）の本質は、異文化間の交流にある。近代に陸路による交通が大きく展開するまで、港湾都市はまさに文化の交差点であり、異文化を前線で受け止め交流する舞台としての宿命を担い、そのための都市を完成させていった。ツーリズムの本質を空間に具体化するための大きなヒントが港湾都市にあると考え、本研究では、そうした交通の要衝としての役割を一旦失った後、観光開発による再生をめざす港湾都市の事例である厳島神社門前町（広島県廿日市市宮島）およびレブカ（フィジー諸島共和国オバラウ島）を、また２都市の先行事例として旧首都ラハイナ（アメリカ合衆国ハワイ州マウイ島）を比較対象として、以下の３点を明らかにする。なおレブカは無名であるが、19 世紀英国統治時代の建築遺産群を抱える旧首都であり、日本政府文化庁とフィジー政府文化遺産局との間で九州大学による調査への協力を確認し、資金調達を期しているところである。

(1) 文化遺産評価：国内外を対象とする交易と文化交流を可能にする空間を内包した港湾都市としての側面に着目しつつ、アジア・太平洋地域に残存する港湾遺産都市と比較し、歴史的変遷と空間的特性、そしてそれら特性を可視化する景観的特性を明らかにすることで、その都市空間を文化遺産として評価する枠組を提示するとともに遺産マネジメントの課題を明らかにする。

(2) 無形遺産評価：上記で評価する都市空間の形成や維持を可能にしてきた歴史的、伝統的な社会・経済や信仰・慣習等のシステムを分析し、継承されているものや何らかの形で復興が必要なものを無形遺産と捉え、文化多様性の視点から評価するとともに、それら無形遺産を現代の社会システムのなかで持続的に機能させていくための条件を明らかにする。

(3) ツーリズム開発評価：「ヘリテージ・ツーリズム開発による地域発展の条件は、遺産の重要性（significance）の真正な継承と地域社会（local community）の持続的な発展の相互補完による実現である」とする研究仮説を設定、厳島門前町及びラハイナにおけるこれまでの遺産マネジメントとツーリズム開発を検証・評価し、両者の持続可能な関係構築の条件を明らかにする。

以上の成果から、将来計画が未整備なまま世界遺産リストへの登録を控えるレブカに対し、遺産マネジメントとツーリズム開発の持続可能な関係構築の条件を明らかにする。

３．研究の方法

(1)研究の枠組み

本研究の目的である文化遺産とツーリズムとの持続可能な関係構築を実現するマネジメントのあり方を解明するため，大きく以下のような３つの課題に対して調査・研究を進める。

① 文化遺産・無形遺産としての重要性（significance）の評価

「文化遺産（伝統的建造物群）としての港湾都市」および「文化的景観としての島」の価値づけを以下の枠組でおこなう。

①-1　都市史評価：両価値を創り出してきた物語としての歴史（空間史・都市史）の解明

①-2　空間史評価：両価値を組み立てている空間構造・都市構造とその歴史的変遷の解明

①-3　景観評価：両価値を構成している要素（建造物・自然物）の残存状況と保存状況の解明

①-4　社会評価：歴史的景観を管理してきた主体と伝統的なシステムおよびその変遷の解明

①-5　無形遺産評価：文化遺産としての都市空間を舞台に展開している無形遺産の発掘と価値付け

①-6　遺産総合評価：a-1〜5 の知見に基づく都市景観および文化的景観としての価値の明確化

② 社会システム等に関する分析

文化遺産・無形遺産の総体として価値付けられる伝統的建造物群および文化的景観そのツーリズム開発をマネジメントするための課題分析を以下の枠組でおこなう。

②-1　物的条件分析：文化遺産を継承・再生産するために必要な技術と資材等に関する分析

②-2　無形条件分析：無形遺産の現状と継承・再興するに必要な条件に関する分析

②-3　ツーリズム分析：遺産の存する国内外におけるツーリズム開発等の現状に関する分析

②-4　開発状況分析：遺産地域の遺産マネジメント及びツーリズム開発の経緯と現状に関する分析

②-5　マネジメント課題分析：b-1〜4 の知見に基づくマネジメント課題の分析

③ 港湾都市および島全体に関する遺産マネジメント方針の検討

下記の項目について、すでに遺産マネジメントやツーリズム開発について経緯のあるラハイナに対しては検証を中心に、他の事例については提案を含んだ検証および課題抽出をおこなう。

③-1　方針検証：遺産マネジメント及びツーリズム開発に関する基本方針の検証・設定

③-2　ゾーニング検証：遺産マネジメントに適切な保存地区およびバッファゾーンの検証・設定

③-3　保存手法検証：遺産建造物の保存・修理手法の検証・検討（建材・技術・経費等含む）

③-4　保全手法検証：遺産を構成する自然物に関する保全方針と整備手法の検証・検討

③-5　修景手法検証：民間によって新たに造られる建造物のデザイン誘導手法の検証・検討

③-6　公共事業検証：公共部門による空間の整備方針と手法の検証・検討

③-7　社会システム検証：遺産マネジメントを支える社会システムの検証・検討

③-8　ツーリズムシステム検証：持続可能な文化遺産マネジメントを支えるツーリズムシステムの検証・検討

(2)調査対象事例の設定

目的で述べたように、主要な調査対象地は、厳島門前町、レブカ、ラハイナであるが、これ以外に研究目的達成のために、必要な諸外国の歴史的港湾都市や遺産都市の調査をおこない、主要３事例の遺産評価の客観性を確保するとともに、当該地域における文化遺産マネジメントとツーリズムの現状を把握し、地域開発手法としてのツーリズム開発の妥当性を検証する。

４．研究成果

「ヘリテージ・ツーリズム開発による地域発展の条件は、遺産の重要性（significance）の真正な継承と地域社会（local community）の持続的な発展の相互補完による実現である」とする研究仮説を検証するため行った研究について、各年度毎に得られた成果を以下に述べる。

2007 年度においては、フィジー諸島共和国旧首都レブカについては、都市史調査、建築調査及び地域社会調査を実施し、遺産の重要性および遺産マネジメントにおける地域社会のポテンシャルの過半部分を明らかにすることができ、ヘリテージ・ツーリズム開発における資源の把握と持続的な発展のための課題が一定程度明らかにできた。またハワイ州ラハイナについては、地方行政府へのヒアリングと資料収集、地域全域にわたる景観

現況調査、居住者の移転調査、そしておもに観光開発開始期以降の都市の土地利用等の空間の変化を把握することができ、遺産の重要性を構成する重要な要素となるコミュニティの有する無形遺産の果たすべき役割について知見を得ることができた。また、合衆国の歴史的景観地区の景観保全システムには、日本のシステムと比較して、従前に予測していなかったユニークな特性があることが判明した。

2008 年度においては、フィジー諸島共和国旧首都レブカについては、都市史調査、建築調査及び地域社会調査の追加補足を実施し、遺産の重要性および遺産マネジメントにおける地域社会のポテンシャルのおおよそを明らかにすることができ、ヘリテージ・ツーリズム開発における資源の把握と持続的な発展のための課題をほぼ明らかにできた。これら研究成果の発展途上国への適用として、ヨルダンの歴史都市サルトに対するエコミュージアム手法の技術移転を JICA 事業と連携して実施し、異なるコンテクストの地域に対する適用可能性を検証しているところである。さらにヘリテージ・ツーリズム開発における遺産のマネジメントの先進事例調査として、欧州（独・仏・伊）の世界遺産 17 地域の調査も実施した。

またハワイ州ラハイナおよび宮島厳島神社門前町については、昨年度の遺産の重要性を構成する重要な要素となるコミュニティの有する無形遺産についての知見をもとに考察を進めた。

2009 年度については、前年度からの都市史調査、建築調査及び地域社会調査を継続して実施し、遺産の本質的価値および遺産マネジメントにおける地域社会のポテンシャルおよび政府や自治体との間に生じてる問題と課題を明らかにすることができ、ヘリテージ・ツーリズム開発における資源の把握と持続的な発展のための課題が明らかにできた。

また、調査計画が予定よりも早く進捗したため、本研究の対象地に共通する遺産と地域社会との関係性を総合的にとらえる概念としてのリビングヘリテージに関する研究に新たに着手し、当該概念の遺産マネジメントに対する適用可能性について、ヨルダン王国サルト市や長崎県神代小路についても新たに対象事例に加え、フィールド調査を実施した。これについては、今年度時点において、本概念を「人の暮らしの中で生み出されたモノやコトの総体としての地域を文化遺産として包括的にとらえる概念であり、現在も人々の生活とともにあり、地域コミュニティに意味合いをもたらし続ける文化遺産」とする研究仮説を得た。

最終年度となる 2010 年度においては、過去 3 年間に対象事例で採取したデータの解析を進めるとともに、昨年度より本研究成果の応用展開を試みているリビングヘリテージ（＝人の住む遺産）研究の展開として、JICA と協力してヨルダン国サルト市において地域社会が持続的に取り組みうる文化遺産マネジメントと観光開発のあり方について実証研究を進め、開発モデルの国際協力への実用可能性を考察した。また、昨年度に引き続き、海外の先進的な歴史的港湾や文化遺産を資源とするツーリズム開発地を調査し、本研究の目指す宮島およびレブカにおけるツーリズム開発の可能性を評価した。

結論としては、宮島及びラハイナの先行事例分析に基づく詳細調査によって、レブカの遺産を単に建造物群の価値として捉えるのではなく、住民による都市遺産や歴史的建造物の住みこなし方を都市史研究、住み方調査研究等の手法を応用、分析することで、リビングヘリテージとして総合的に評価することができ、その評価価値をマネジメントするための計画策定条件を抽出可能であることを明らかにしたことが中心的成果であると言える。

さらに、今後につながる研究成果として、日田市小鹿田焼の里重要文化的景観や雲仙市神代小路重要伝統的建造物群保存地区等の日本の遺産地域の事例からリビングヘリテージ価値評価の枠組みを抽出できた点、ヨルダン国サルト市および欧州先進事例調査から、リビングヘリテージ評価の枠組みを適用することで、歴史的市街地や集落等に対して行われてきた従来の遺産評価に、新たな視点を導入でき、日本独自の文化遺産観光開発国際協力の可能性を確認できた点を挙げることができる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

①西山徳明「集落・町並みの保存理論からみた文化的景観」『文化的景観研究集会（第２回）報告書　生きたものとしての文化的景観ー変化のシステムをいかに読むか』奈良文化財研究所研究報告，第５冊，奈良文化財研究所，pp.21-38，2010（査読有）

②八百板季穂・窪崎喜方・西山徳明「南太平洋島嶼国における近代都市としての景観の価値付けーフィジー国旧首都レブカの文化遺産マネジメントに関する研究その１」『日本建築学会計画系論文集』，第 75 巻，

第 652 号，日本建築学会，pp.1455-1462，2010（査読有）
③村上佳代・西山徳明「萩市における文化資源の発掘と都市遺産概念について」『日本建築学会計画系論文集』第 75 巻，第 657 号，日本建築学会，pp.2615-2624，2010（査読有）
④山口知恵・西山徳明「リビングヘリテージ概念に関する基礎的研究」『日本建築学会研究報告九州支部』計画系，第 49 号，日本都市計画学会，pp.361-364，2010（査読無）
⑤麻生美希・佐藤睦美・西山徳明他 1 名「農村集落における空間構成の変遷と景観保全の課題」『日本建築学会計画系論文集』No.646 ，日本建築学会，pp.2637-2645，2010（査読有）
⑥山口知恵・松本将一郎・西山徳明「小鹿田焼の里皿山における伝統的な生業の持続と文化的景観の保全に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』，No.644，日本建築学会， pp.2215-2222，2009（査読有）
⑦西山徳明ほか 6 名「日田市「小鹿田焼の里」文化的景観の保存計画に関する研究 その 1ー6」『日本建築学会研究報告九州支部』計画系，第 47 号・3，日本建築学会，pp.357-380，2008（査読無）
⑧西山徳明ほか 2 名「「萩まちじゅう博物館」における文化遺産マネジメントに関する研究 その 6,7」『日本建築学会研究報告九州支部』計画系，第 47 号・3，
日本建築学会，pp.329-336，2008（査読無）
⑨西山徳明ほか 4 名「持続的な居住の視点からみた観光マネジメントに関する研究−ハワイ州ラハイナを事例として−」『日本建築学会研究報告九州支部』計画系，第 47 号・3， pp.337-340，2008（査読無）
⑩西山徳明ほか 3 名「フィジー諸島共和国旧首都レブカの町並みに関する研究 その 7ー9」『日本建築学会研究報告九州支部』計画系，第 47 号・3，日本建築学会，pp.385-392，2008（査読無）

〔学会発表〕（計 3 件）
①西山徳明「ヨルダンへのエコミュージアム観光開発技術によるリビングヘリテージ保護の試み」，文化遺産国際協力コンソーシアム／アジア文化遺産会議「西アジアの文化遺産―その保護の現状と課題」2011.3.3，東京文化財研究所（東京都）
②西山徳明「保存のためのフィールドワーク」日本建築学会，2010.9.11，富山大学（富山市）
③西山徳明「集落・町並みの保存理論から見た文化的景観」『奈良文化財研究所 文化的景観研究集会（第 2 回）』2009.12.18，奈良県歯科医師会館講堂（奈良市）

〔図書〕（計 2 件）
①西山徳明「我が国の文化財の新たな展開～文化財の総合的把握と歴史文化基本構想の役割について」『季刊まちづくり 25 号』，学芸出版社，2009，7 頁
②西山徳明・宮本雅明ほか『厳島神社門前町 廿日市市厳島伝統的建造物群保存対策調査報告書』廿日市市教育委員会，2007，218 ページ

６．研究組織
(1)研究代表者
西山 徳明（NISHIYAMA NORIAKI）
北海道大学・観光学高等研究センター・教授
研究者番号：６０２４３９７９

(2)研究分担者
宮本 雅明（MIYAMOTO MASAAKI）
（2007 年度のみ）
九州大学・芸術工学研究院・教授
研究者番号：８０１２８１１５

(3)連携研究者
宮本 雅明（MIYAMOTO MASAAKI）

（2008ー2010 年度）
九州大学・芸術工学研究院・教授
研究者番号：８０１２８１１５